

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13223

研究課題名（和文）付加詞節の統語構造に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Syntactic Structures of Adjunct Clauses

研究代表者

吉村 理一（Yoshimura, Riichi）

九州大学・言語文化研究院・助教

研究者番号：70815282

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、(i) 付加詞条件に関して、日中英語のデータを比較・分析し、その普遍性を検証すること(ii) 付加詞条件に従う例と従わない例（項の抜取りに関しての定形付加詞節と非定形付加詞節の文法性の違い）を原理的に捉えられる派生メカニズムを追求することを研究の目標に掲げた。本調査により、定形と非定形付加詞節の節最上位の構造の違い、定形付加詞節の種類によるCP構造の違いを明らかにし、フェイズ性や主節CP領域との一致の有無が内部からの項の抜取りの可否に關与することを示した。また、埋め込み領域における日本語の丁寧語の出現を例に、節周辺構造の更なる精緻化にも寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間言語の本質を追求する生成文法理論で派生のサイクルとして仮定されているフェイズ性と節周辺構造を探索するカートグラフィ研究を軸に、付加詞条件をめぐる日中英語データの整理と付加詞節の構造構築の解明に寄与した。整理したデータに基づき、付加詞条件の例外がどのように導出されるかを調査し、付加詞条件をめぐる日中英語の言語間の違いを言語構造の観点から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to achieve the following objectives: (i) to compare and analyze data from Japanese, Chinese, and English with respect to the adjunct condition and examine its universality, and (ii) to explore derivational mechanisms that systematically account for the adjunct condition and its exceptions.

As the investigation progressed, it was demonstrated that there are structural differences at the clause-peripheral domain between finite and non-finite adjunct clauses. Furthermore, even within finite adjunct clauses, there are differences in CP structures, and the presence or absence of phasehood and agreement with certain projections of the main CP domain affects the possibility of argument extraction. Additionally, by examining the occurrence of honorifics in embedded domains in Japanese, this study contributed to a further refinement of peripheral clause structures.

研究分野：英語学・言語学

キーワード：統語論 生成文法 丁寧語 副詞節 付加詞条件（付加詞の島）（非）定形節 話題化 発話行為

1. 研究開始当初の背景

筆者は英語を中心に付加詞条件に関して研究を続けてきた。付加詞条件とは、副詞節など主節に付加する構成素(付加詞節)から項と付加詞の移動を禁じる制約のことで、自然言語に普遍的であると考えられている。この前提のもとで、理論言語学(特に生成統語論の分野)においては付加詞節内からの要素の移動を禁止する派生分析が提案されてきた。代表的研究として、例えば、Huang (1982) による抽出領域条件(Condition on Extraction Domain: CED)分析、Chomsky (1986) による下接の条件(Subjacency Condition)分析、Uriagereka (1999) による多重書き出し(Multiple Spell-Out)分析、Stepanov (2001, 2007) や Müller (2010) による非循環的遅発併合(Late Merge)分析、Bode (2020) のラベル付けによる統語操作への非可視化分析が挙げられる。

しかし、近年のインターネット検索エンジンの技術向上や言語コーパスの発展により、その例外と思われるデータの発掘も同時に進んでいる。さらに理論言語学の分野においては、付加詞節の種類やその生起する位置(文頭・文中・文末)が、同節内からの移動の可否に影響を及ぼす事実の報告がなされ、その観察に基づいた派生メカニズムの提案と議論が続いている(Hornstein (2001), Taylor (2007) 等)。また、付加詞節内からの移動については文の定形性も深く関連していることが報告されており、非定形付加詞節且つ同節が表す内容が主節の表す事象(event)の一部として包含される場合は、同節内からの項の移動が可能であるという観察もなされている(Truswell (2007, 2011) 等)。このように、付加詞節の派生とその内部からの要素の移動の可否をめぐっては、統語と意味のインターフェイス上でどのように処理されてその制約が導き出されるのか注目を集めている。さらに、付加詞条件の普遍性について通言語的な観点から問い直す動きもあり、データの掘り起こしと整理も並行して行う必要性も出てきている。

以上の情勢を鑑み、付加詞条件に関するデータの発掘を行い、付加詞の意味や種類ごとに整理することで言語研究における経験的な貢献が見込まれると考えた。この貢献に加え、これまで英語データを中心に理論構築されてきた付加詞節の派生について、新しい英語データと通言語的なデータ(主に日本語と中国語)を基礎にした分析を提案することで言語理論のさらなる発展にも寄与することができるように思われたので、本プロジェクトを提案した。とりわけ、移動現象に関しては意味論や語用論による制約も深く絡んでいることが先行研究で指摘されていることから(Kroch (1989), Kuno and Takami (1997), Fox and Hackl (2007), Boeckx (2012) 等)、カートグラフィ研究との整合性を視野に入れ、付加詞節の種類に応じてそれらが統語的にどのような補文標識句(CP)構造を持ち、主節のどの領域といかにして併合して派生されるかを探求することを主軸に据えた。

2. 研究の目的

先述したように、本プロジェクトは付加詞条件の普遍性の検証とそれらの種類に応じた派生メカニズムの解明を目指すものである。具体的な取り組みとして以下の2つを掲げた。

- ① 付加詞条件(付加詞内部の凡ゆる要素の拔出しを禁止)の普遍性に関する通言語的検証
- ② 付加詞条件に従う例と従わない例を原理的に捉えられる派生メカニズムの解明
(定型・非定型付加詞節に対する原理的説明が可能な分析を求める)

目的①については、付加詞条件効果が強く観察される英語やスペイン語においてでさえ条件節からの項の抜取りが文法的と判断される事実を踏まえ、当該言語において様々な(非)定形

付加詞節からの項と付加詞の抜取りデータを集約し、その文法性を確認することで付加詞の島制約の適用条件そのものを見直すことを目指した。さらに、この取り組みを先行研究で付加詞条件の例外データが観察されている日本語と中国語に拡張し、これらの言語においても同様の調査を実施して記録をとることとした。

目的②については、付加詞節がどのような内部構造を持ち、また主節とどのように併合して生起するか、生成統語論の立場から研究した。付加詞節の派生とその内部からの移動をめぐっては意味や語用的な要因が深く関連している事実を踏まえ、Rizzi (1997, 2004), Cinque (1999), Haegeman (2004, 2006, 2012) をベースにカートグラフィ研究から付加詞条件とその例外の現象を捉え、付加詞節の持つ CP 構造と主節への併合位置の違いに着目することとした。さらに、話題化句 (TopicP) や焦点化句 (FocusP) を集約し、発話の力・節タイプを表す発話力句 (ForceP) の文法上の役割についても調査し、その構造をさらに精緻化することや要素の移動を駆動するメカニズムも探求することとした。

3. 研究の方法

目的①に応えるためには、言語事実を言語と付加詞節の種類ごとに整理していく必要がある。そのため、まずは英語データについての精緻化から始めた。定形・非定形、付加詞の種類、派生位置 (文頭・文中・文末) の違いに分けて、その内部からの項および付加詞の抜取りについての文法性を記録に取ることにした。データ採取にあたっては、インターネットから一致検索等の絞り込み技術を活用してデータそのものの抽出を行ったり、コーパスや関連の文献を引き当てたりし、一片ずつ確認することとした。また、複数名のインフォーマント (イギリス、アメリカ、カナダ出身) からの協力を得て、例文作成や文法性判断の記録採取も行なった。これらのデータは、出典、文法性判断を行なった母語話者の情報、人数、コメント等をアノテーションに付して自前のデータベースに保存した。この取り組みを日本語と中国語にも応用し、同様のデータベースを可能な範囲で作成した。中国語データについては、当該言語の専門家である Hsu 准教授 (Tamkang University) と筆者が所属する大学に在学している中国語母語話者 (中国本土および台湾) からの研究協力を賜り、データベースの構築に努めた。

目的②に対しては、付加詞節が持つ CP 構造と付加位置の違いに着目し、通言語的な観点から CP (あるいはその上位の機能投射) の構造と主節との関わりを解明できるように、英語、中国語、日本語で取り上げる現象を分けて研究を進めた。例えば、先行研究からデータも分析も豊富に揃っている英語では、これらの知見を踏まえ、付加詞条件の例外がどのような要因によって派生されるかについて、付加詞節が持つ CP 構造と主節への併合位置の違いから捉える分析案を探った。中国語の分析については、中国語統語論の専門家である Huang 教授 (Harvard University) と Hsu 准教授 (Tamkang University) から助言をいただけることになり、筆者が集めたデータの確認と筆者による統語的分析案の妥当性についてご指導をいただくこととした。日本語については、付加詞条件の例外データの分析に加え、埋め込み領域における丁寧語の生起から従来の CP 構造をより洗練化させる取り組みを行うことにした。

4. 研究成果

目的①については独自のデータベースを構築し、データの精査やアノテーション作成と添付を行なった。データベース作成とデータ分析については、数理・データサイエンスの専門家から助言を賜り統計的・視覚化処理を加えた。その成果を数理・データサイエンスの研究会で発表した (吉村 (2019))。中国語データの整理と分析については論文にして刊行した (吉村 (2020))。

目的②に対しては、言語ごとに調査と成果発表を進めた。まず、先行研究によりデータも分析も豊富に揃っている英語については、Haegeman (2012) 等の研究を援用し、定形付加詞節に (1) に示す CP 構造の違いがあることを示した。以下の説明は Yoshimura (2021) に基づく。

- (1) a. [Force(+) [Top* [Foc [Sub [Mod* [Fin(+)]]]]]]
b. [Force(-) [Sub [Mod* [Fin(+)]]]]

話題化句や焦点化句が最上位の ForceP に集約され、Force が活性化された際に移動を駆動する端素性 (edge feature) も出現し、精緻化された主節 CP 領域のいずれかの機能投射と一致を示すことで、付加詞条件に従う例とそうでない例を説明できる可能性を提示した。例えば、条件節はその意味機能により話題化句として見なされることから、基底位置から主節の TopP 指定部へ移動して話題化の一致を示す。当該条件節内部の構造は (1a) のようになっているため、内部からの項の移動も許すこととなる。反対に、(1b) のような構造を有する場合は移動の要因を欠くことから付加詞条件が説明されることを示した。他方で、非定形付加詞節についてはフェイズ性を有さない構造を持つと仮定し、その内部からの移動が認可されることを説明した。しかし、非定形付加節からの抜取りが禁止される例については十分な研究ができず今後の課題として残すことになった。とはいえ、上述の成果をもとにすることで、A-and-B の等位構造を持ちながら副詞節と帰結節の意味を表す構文の分析へ拡張することができた (日本英語学会国際春季フォーラムにおいて Yoshimura (2024) として発表予定)。

日本語と中国語については、定形付加詞節の類別と生起位置の違いに基づく項の抜取りの可否を調査した (吉村 (2020))。その結果をもとに、日本語の定形付加詞節とも比較しながらカートグラフィ研究を主軸とした統語分析を提示した (Yoshimura (2019, 2020))。本研究のインフォーマントによれば、中国語の定形付加詞節内部からの項の移動は当該付加詞節が文頭に生起する場合に文法的であると判断される傾向が高いことが判明した。文末に生起した付加詞節からの項の抜取りは、前置された場合と比較して非文法的として判断され、話者の容認度にばらつきが見られた。このことは英語の条件節からの項の抜取りのパターンと類似しており、日本語と中国語にも同様の分析が拡張できる可能性を示した。

最後に、周辺の節構造のより細密な精緻化については日英語の否定現象と日本語の丁寧語の生起条件から研究を進めた。Haegeman and Hill (2011, 2014), Coniglio and Zegrean (2012), Miyagawa (2017, 2022) を援用し、従来の CP より上位に話し手や聞き手との一致を示す機能投射がある可能性を追究するため、主節現象として唱えられてきた丁寧語の分布を埋め込み領域下でも見直し、その文法性を説明することができるメカニズムを提案した (吉村 (2021), Yoshimura (2023, 2024))。具体的には、従来の精緻化された CP 構造の最上位として想定されてきた ForceP から、発話行為 (Speech Act) と節タイピング (Clause-typing) を分化させ、これらが独立して投射する可能性を示した。埋め込み領域下での丁寧語の認可には、節内部での演算子の移動と主節領域にある敬語表現からの構成素統御が関係している事実を明らかにした。また、埋め込み領域の丁寧語の認可は、一種の呼応現象のようにも捉えられる。そのため、日英語の否定現象も研究対象とした。否定呼応や否定と疑問のスコープ関係を中心にデータ収集を行い、統語的な立場からそれらを分析し、丁寧語の分布との関連性を研究する予定であったが、時間の都合で拡張することができなかった。しかし、整理したデータを機械翻訳の修正パッチとして応用し、これまで機械翻訳上問題となっていた日英語の否定疑問文とその応答文の翻訳に活用できる可能性を示すことができた (吉村 (2019, 2020, 2022), 藤村・吉村 (2022), 藤村・吉村・冬野 (2022))。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoshimura, Riichi	4. 巻
2. 論文標題 Honorific Concordance in Japanese: A Case Study of Politeness Marker mas in Embedded Domains	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Fukuoka Linguistic Circle 50th Anniversary Memorial Essay Collection	6. 最初と最後の頁 318-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤村太樹, 吉村理一, 冬野美晴	4. 巻
2. 論文標題 機械翻訳の精度向上を目的とした機械学習による日本語否定疑問文の命題認識の型分類	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第36回日本音声学会全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村理一	4. 巻
2. 論文標題 翻訳の見地から見た否定一致現象—日英語の比較を主に—	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 韓国日本文化学会第61回国際学術大会兼韓国日本研究総連合会第10回学術大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 407-410
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村理一	4. 巻
2. 論文標題 日本語の敬語表現から見る統語構造 丁寧語「です/ます」を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 韓国日本文化学会第60回国際学術大会Proceedings	6. 最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshimura, Riichi	4. 巻 27 (3)
2. 論文標題 The Structural Asymmetry Between Finite and Non-finite Adjunct Clauses in English	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Language and Linguistics	6. 最初と最後の頁 47-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉村理一	4. 巻 No.38
2. 論文標題 日英語通訳・翻訳における否定呼応現象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文化論	6. 最初と最後の頁 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村理一	4. 巻 55
2. 論文標題 中国語の副詞節と付加詞条件-データから見る付加詞節の種類とその統語的位置の影響一	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語科学	6. 最初と最後の頁 55-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 吉村理一
2. 発表標題 andを伴う条件接続と項の抽出しに関する一考察
3. 学会等名 長崎言語学研究会 (2023年9月)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshimura, Riichi
2. 発表標題 Politeness in embedded and subordinate domains
3. 学会等名 The Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (TEAL) 13 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤村太樹, 吉村理一
2. 発表標題 日英語機械翻訳の精度向上を目指したデータセットの検討とモデル化に関する研究 - 否定疑問文とその応答 -
3. 学会等名 福岡言語学会2022年度第2回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉村理一
2. 発表標題 日本語の敬語表現から見る統語構造 丁寧語「です/ます」を中心に
3. 学会等名 韓国日本文化学会第60回国際学術大会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshimura, Riichi
2. 発表標題 A Syntactic Analysis of Chinese Adverbial Clauses Bearing Topichood
3. 学会等名 The 32nd North American Conference on Chinese Linguistics (NACCL-32) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉村理一
2. 発表標題 日英語通訳・翻訳における否定呼応現象
3. 学会等名 日本比較文化学会2020年度国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoshimura, Riichi
2. 発表標題 Adjunct Condition in Japanese and Chinese: Extraction from Conditional Clauses
3. 学会等名 1st Workshop on Data-Driven East Asian Linguistics (at Tamkang University) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉村理一
2. 発表標題 付加詞条件の普遍性と統語構造 日・中・英語データに基づく実証的研究ー
3. 学会等名 数理・データサイエンスに関する教育・研究支援プログラム研究成果発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉村理一
2. 発表標題 通訳・翻訳教育と英語学研究の接点ー修飾関係および時制表現を中心にー
3. 学会等名 2019年度日本比較文化学会関西・中国四国・九州3支部合同大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 武内梓朗・竹安大・吉村理一・萱嶋崇・谷川晋一・田中公介・古賀恵介（共編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 544
3. 書名 福岡言語学会50周年記念論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------